

2024年5月22日

学校名 旭が丘小学校

学校長名 楠田 謙治

令和6年度 校内研修実施計画

I 研究主題及び教科

研究主題	生きて働く言葉の力の育成 ～向き合う 味わう 楽しむ～
教科・領域	国語科・領域全般

II 主題設定の理由

1 これまでの研究の経過

本校児童には、自分の思いや考えをもつことや、それらを文章や言葉で相手に伝えることに課題があると考え、昨年度から教科を国語科とし、「言葉を正しく理解し、適切に表現する子」を目指し、研究・研修を行ってきた。具体的には、表現する必然性を生み出す単元計画の探究として、考えを形成するための選択場面の設定を工夫し、選択のさせ方や選択させる項目の選定などを実践・検討してきた。

これらの取組を通して、選択場面を設定することで自分の考えをもつことができる児童が増えたと考える。なかなか自分の考えがもてない児童も、選択項目の中から選ぶことで自分の考えをもつことができ、自分と違った選択項目を選んだ児童の考えを聞くことで、自分と他者の考えを比較して考えることができるようになった。しかし、思いや考えをもつことには個人差が見られ、語彙の少なさから思いや考えを自分の言葉でまとめ、伝えることについてはまだまだ課題が残った。

昨年度の全国学力・学習状況調査の質問紙より「国語の授業は好きですか」の質問に対して「当てはまらない」と答えた児童は23.1%で全国値よりも9.8%上回っている。また、「国語の勉強は大切だと思いますか」の質問に対して「当てはまる」と答えた児童は69.4%で全国値よりも0.3%上回っている。つまり、「国語の勉強は大切だと思っているが好きではない」ということが回答結果からわかる。

2 学習指導要領とのかかわり

学習指導要領において、国語科の目標は、次のとおりである。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

学習指導要領において、育成すべき資質・能力は「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」という3つの柱で示されている。(1)の「知識及び技能」に関する目標では、言葉の特徴や使い方、話や文章に含まれている情報の扱い方、我が国の言語文化に関する「知識及び技能」を日常生活における様々な場面で、主体的に活用できる、

生きて働く「知識及び技能」として習得することが重要となる。(2)の「思考力・判断力・表現力等」に関する目標では、日常生活における人と人との関わりの中で、思いや考えを伝え合う力を高め、言葉を手掛かりにしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力を養うことが目指されている。その中で低学年では、自分の思いや考えを「もつ」、中学年では「まとめる」、高学年で「広げる」と示されており、まさに本校の児童に課題として挙げられる力であり、重点的に指導にあたっていく必要がある。(3)の「学びに向かう力・人間性等」に関する目標は、言葉がもつよさを感じることを、読書をする、思いや考えを伝え合おうとする態度を養うことである。このうち、言葉がもつよさについては、低学年で「感じることを」、中学年で「気付くことを」、高学年では「認識すること」と系統化されている。日常生活の中で毎日使っている言葉は、いわば空気のようなもので、そのよさや役割などが意識されることはほとんどない。しかし、その言葉によって、考えを深めたり、自分の思いや考えを相手に伝えたりしている。そうした言葉の働きなどを意識し、うまく説明できなくても、よさを感じたり興味をもったりすることが大切である。そして、これらの力は、他の「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」の育成を支えるものであり、国語科の力を身につける上で土台となる力であると考えられる。

3 研究の主題と切り口になる教科

以上のことから、今年度も引き続き、教科・領域を国語科の全領域とし、「生きて働く言葉の力の育成」を研究主題に設定する。「言葉と向き合う 言葉を味わう 言葉で楽しむ」ことのできる国語科学習の創造を目指して、研究・研修を進めていく。国語科はコミュニケーションを図る上で基盤となる言葉の力を育むことを目的としている教科である。表現力に課題のある本校の児童にとって、前述した学習指導要領における国語科の目標に向けて、国語科の指導方法としての具体的な方策や手立てを検証していくことは、課題の改善につながると考えられる。

主題にある「生きて働く言葉の力」とは、言葉を正しく理解し、順序立てて、自分の言葉で思いや考えを適切に表現できる、他者と考えを深めたり相手の心を動かすような表現をしたりして豊かに思いや考えを伝え合える力のことでありと定義する。児童一人ひとりが、楽しそうにうれしそうに言葉を使い、伝えたい思いがあふれている姿こそが「生きて働く言葉の力」の育成を通してめざす児童の姿であると考えられる。そして、それらの力が、国語科のみならず、他教科、さらには日常生活のさまざまな場面で活かされるよう日々の授業実践に取り組んでいく。

副題にある「楽しむ」とは、他者との言葉の交流であったり、筆者や登場人物との対話であったり、時には、自分の思いや考えが伝わらないもどかしさなど、言葉を通して困難さを感じていることも含めたものであると捉える。「言葉で楽しむ」学習を通して、「国語が好き」と思える児童を育てることを研究・研修の土台としていくことも大切にしていきたい。

また、今年度は研修部の組織体制を変え、教員一人ひとりが学びのリーダーとなり、より一層主体的に研修に取り組めるよう研究・研修のあり方も見直していきたい。大規模校であるがゆえ、全体としての児童の課題を絞ってとらえることが難しいといった現状もあると考えられる。主題に向けて、それぞれの学級、学年、もしくは学年部の児童の現状と課題を把握し、児童の課題に応じた授業づくりを実践していけるとよい。そして、さまざまな年代の教員が多数在籍している大規模校である本校の特徴を活かし、教員同士が多くのアイデアを出し合い、試行錯誤しながら、来年度以降の研究・研修につながるような1年としていきたい。

Ⅲ 研究内容及び方法

1 今年度の研究について

(1) 研究構想

【学校教育目標】 すべての子どもに居場所とやる気を保障できる学校

【めざす子ども像】

知・徳・体の調和がとれ、主体的・協働的に行動できる子

【研究主題】

生きて働く言葉の力の育成
～向き合う 味わう 楽しむ～

【研究目標】

生きて働く言葉の力を育むことをねらいとし、本校児童の課題である思いや考えを表現する力を育成していくことを重点目標とする。

- ① 自分の思いや考えを表現する力を育成するための指導内容や指導方法を探究する。
- ② 各教科の学習内容の定着および家庭学習・読書の推進など、児童の基礎学力の定着につながる指導・手立てを検討する。

【めざす子どもの姿】

- ① 自ら思考・判断し、自分の思いや考えを表現できる子
- ② 習得した知識、技能を積極的に活用できる子
- ③ 言葉を使った他者との協働を通して、主体的に考えようとする子

【主な研究内容とその手立て】

○授業展開の工夫

- ・ I C T、思考ツールを活用した効果的な学習方法
- ・ 児童の情報活用能力の向上をめざした取組
- ・ 児童の実態に応じた独自の思考ツールやワークシートの開発

○語彙や表現の獲得

- ・ 言葉の宝箱の活用、「〇〇の言葉の宝箱」や「言いかえ図鑑」の作成
- ・ 前項を活用した「書くこと」の領域、日常的な日記や作文、スピーチ等での学習場面の設定
- ・ 詩の学習を通して語彙や表現の獲得や広がりを意識した取組

○主体的な学び

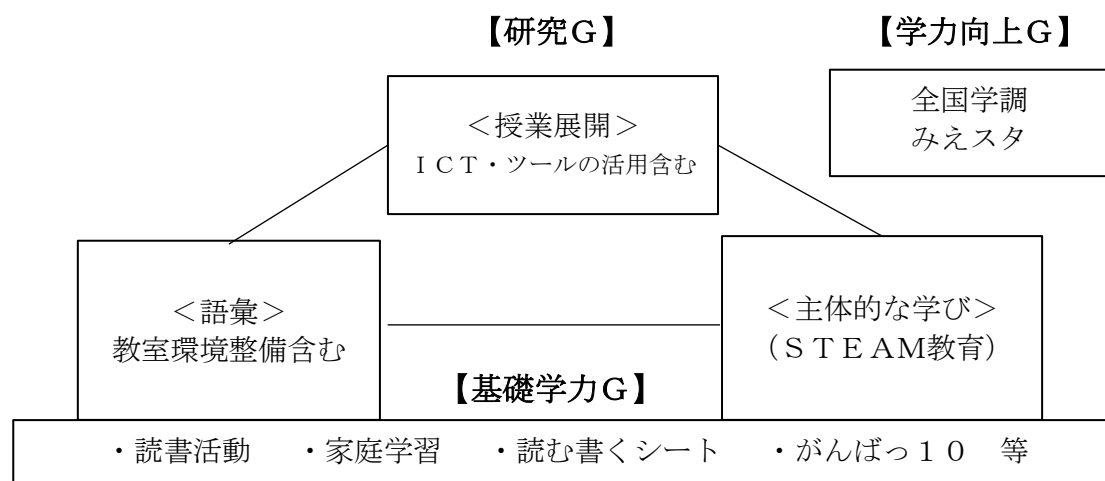
- ・ 単元ゴールに向けて、学習計画を自ら立てる自分らしい学び
- ・ 話し合い活動の工夫による子ども同士の学び
- ・ 明確な視点を与えたふり返し活動から生まれる学び

○基礎学力の定着

- ・ 読書活動の充実
- ・ 家庭学習の取組
- ・ 朝学習の取組
- ・ がんばっ 10 の取組

○全国学力学習状況調査・みえスタディ・チェックの分析と児童アンケートの実施

(2) 組織体制



上記のように、研修部を3つのグループに分ける。さらに研究グループについては、今年度、研究の柱となる内容ごとに①授業展開 ②語彙 ③主体的な学びの3つのチームを設け、各チームにはチームリーダーと研修部もしくは研修部以外のメンバーを数名おくこととする。この組織体制は、各チームリーダーを中心に、チームメンバー、研修部、そして全職員の知識やアイデア、経験をもとに全職員で研究・研修を進めていくことを目的としている。

(3) 柱となる研究の内容とその具体的な取組

①授業展開の工夫

本校児童は情報の収集能力は高いように感じる。しかし、集めた情報を精査せずにただコピー＆ペーストをする、言葉の意味を知らずに用いるなど、必要な情報を比較・分析し、取捨選択する力が弱い。そのため、授業の中で考えをもつことができても、考えの根拠を見つけられず、抽象的なままでどのように伝えたらよいのか、表現すればよいのか分からないと考える。これらの姿から、児童の考えを具体化するための手立てとして、I C Tや思考ツールの効果的な活用方法について検証していく。I C Tや思考ツールの効果的な活用方法を見出し、授業に取り入れ、児童が経験を積み重ねることで情報活用能力を高めていく。そうすることで、得た情報や友達の意見を自らの考えと比較・整理・分析する力が身につく、自分の考えを具体化できるようになることが期待できる。

a) I C Tについて

国語科の学習におけるI C T活用について、文部科学省は以下の場面での活用を想定している。

○学習情報を収集して整理する場面

- ・インターネットを活用して学習課題に関連する情報を調べ、集めた情報を内容に応じて整理する。

○自分の考えを深める場面

- ・自分で考えたことを画面上の付箋に書き出し、その付箋を目的や意図に応じて分類する。
- ・プレゼンテーションソフト上でスライドを並べ替えるなどして、自分の伝えたいことがより明確に伝わるよう、目的や意図、相手に応じて用いる情報を取捨選択したり、話や文章の構成を考えたりする。

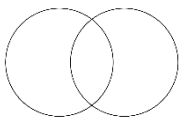
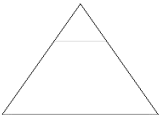
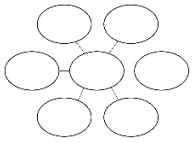
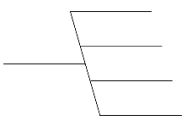
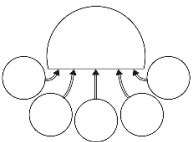
○考えたことを表現・共有する場面

- ・デジタルカメラやカメラ付端末を活用し、スピーチや話し合いの様子を録画・再生して自分の話し方を確認したり助言し合ったりする。
- ・プレゼンテーションソフトを活用して発表資料を作成する。

このうち特に「学習情報を収集して整理する場面」と「自分の考えを深める場面」の効果的な活用について探っていく。しかし、いきなり膨大な情報を整理・分析することは難しい。そのため、まずは身近な言葉集めなどの活動からスタートし、収集・比較・分析の経験を積むことで、膨大な情報を取捨選択する基礎となる力を身につけていく。また、端末を活用するためには基本的な操作スキルの習得が必須である。このような指導を行っていくには、教師自身の端末活用能力を向上させる必要がある。今年度は年間を通して、各教員が自身に応じた端末活用の目標を立て、実践を積み重ね、全職員の活用能力のレベルアップも図っていききたい。

b) 思考ツールについて

思考ツールとは、自らの考えを作り出すことを助けてくれる道具であり、多くの種類、使い方があある。その中から児童の考えを具体化するために効果的なツールを下記に示す。

名前	思考ツール	できること	身につくスキル
ベン図		共通点・相違点を見つける	・比較する
ピラミッドチャート		複数の事柄の関係を構成する	・構造化する
イメージマップ		自分の思考を視覚化する	・関連付ける
くま手チャート		分析する、アイディアを出す	・多面的にみる
クラゲチャート		理由を挙げて、具体化する	・理由付ける ・具体化する

思考ツールを活用することで、自らの考えや収集した情報を可視化することができる。考えという目には見えないものが可視化されることで、問題点や解決の方向性が見えやすくなる。そのため、自らの考えを具体化し易くなるだろう。また、考えを持つことが難しい児童にとっても、情報が可視化されることで考えをもつきっかけになると考える。しかし、ただ授業の中で取り入れるだけでは効果は薄い。より効果的な活用方法を見出すためには、教師自身がそれぞれのツールの意図を理解し、授業の中でより効果的に活用できる場面を考える必要がある。また、ICTと思考ツールは非常に相性がよい。紙に直接書き込むよりも、考えの変容が視覚的に捉えられ、友達の考えとの比較が容易であるなど多くの利点がある。しかし、紙ベースなどいわゆるアナログ的な使い方をするほうが効果的な場面も想定される。ICTにとらわれるのではなく、ICTが効果的なのか、アナログ的な使い方が効果的なのかについても実践、検証を重ねていく。

また、思考ツールを本校児童の実態に合わせより効果的なものになるように改良し、授業の中で検証することにも取り組んでいく。本校児童の課題に即した「思いや考えを伝えたい」思考ツールやワークシートの開発にも取り組んでいきたい。

②語彙や表現の獲得

国語科学習指導要領には、語彙について以下のように示されている。

中央教育審議会答申において、「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の質と量の違いがある」と指摘されているように、語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力の重要な要素である。このため、語彙を豊かにする指導の改善・充実を図っている。

語彙を豊かにするとは、自分の語彙を質と量の面から充実させることである。具体的には、意味を理解している語句の数を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化などへの理解を通して、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高めることである。

つまり、語句の意味を知ることに加え、さまざまな語句を特徴や使い方によって類別して捉えることで、使い方の範囲が広がり、語彙を豊かにすることができるということである。

例えば、「うれしい」という語句の類義語には、「楽しい」「愉しげ」「ご機嫌」「ハッピー」「喜ばしい」「喜々たる」などがあり、自分の立場や状況によって使い分けることができる。しかし、これらの語句およびその意味を知らなければ使い分けることはできない。児童の作文を読んでいても、「楽しかったです」「うれしかったです」の表現が多く、書き手による違いはさほど見られないことが多い。より多くの語句を獲得し、使い分けをすることができる、すなわち語彙を豊かにすることができれば、児童がより具体的に自分の気持ちを表すことができるようになる。

また、意味を知らずに言葉を使う児童の姿が度々見られる。「使っている言葉の意味はこういうことだけど、あなたが伝えたいことは本当にそういうこと？」と確認すると子どもは慌てて首を横に振る、ということも珍しくはない。

児童がさまざまな語句に触れ、意味や使い方を知ることができれば、より自身の状況や心情にあったものを選び、表現することができるだろう。『楽しかった』でいいや』ではなく、「自分の気持ちを振り返れば『楽しかった』がピッタリだ」といった、言葉にこだわり、言葉を楽しむことのできる児童の姿を目指していく。

<通年での取組>

a) 言葉の宝箱の活用・〇〇の言葉の宝箱（低学年、クラス単位での活動）

国語の教科書の巻末には「言葉の宝箱」が掲載されている。例文は掲載されていないので、教材文に近い表現が出てきたときに活用したり、児童が文を書く場面で活用したりすることが予想される。

「〇〇の言葉の宝箱」（空白にはクラスが入る）とは、クラスで言葉集めをする活動のことである。カードに語句とその使い方を記入し、掲示やファイリングなど、クラスに応じた方法でためていく。活動によっては、「〇〇の言葉の宝箱」から自分の状況にあった言葉を選び、活用することも考えられる。

b) 「言いかえ図鑑」の作成（高学年、個人での活動）

1つの語句に対しての類語を集める活動である。必ず例文を記入し、どのような場面でその語句を使うことができるのかを記入していく。同じ語句に対し全員が作成すれば、集まる類語、例文に違いが生じ、さらに語彙を豊かにすることができるだろう。

c) 「書くこと」の領域、日常的な日記や作文、スピーチ等での学習場面の設定

a)b)で示した活動を活かし、「書くこと」の授業を進めていく。国語科の「書くこと」の学習だけでなく、日ごろの学級活動や家庭学習などの日記や作文、スピーチ原稿作成などにも活用していく。

<単発での取組>

d) 詩の活用

詩には作者がこだわった言葉やさまざまな表現技法が使われている。言葉を隠し、当てはまりそうな言葉や表現技法を探す活動を通して、言葉の面白さに気づける授業をしていく。

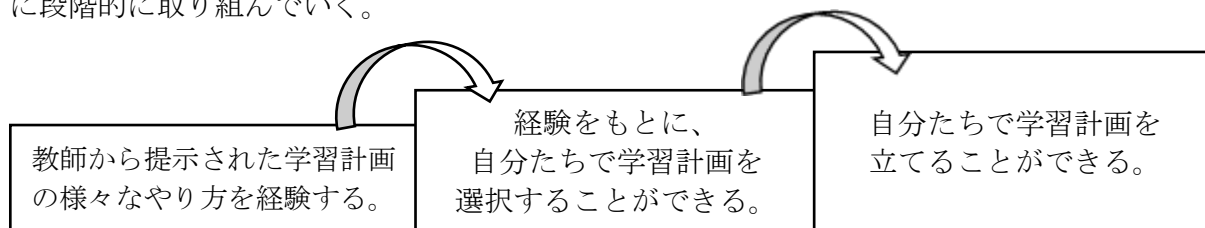
③主体的な学び

学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの観点での授業改善を行うことが示されている。その中でも、学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという点に焦点をあて、授業改善を行っていく。

児童が学習を振り返って、今日の学習が「分かった」「楽しかった」「なぜ」「次は、もっとこうしたい」など、児童自身が学習を楽しみながら、次への学びへと学習内容を調整する姿を目指していく。教師が学習内容を計画し教える授業から、児童同士で計画し学び合う授業へと改善していく。つまり、一方的に教師が教え込む部分を最小限にし、児童が考え、話し合う場面を多く確保することで、児童同士の学びを広げ、主体的な学びができると考える。そのために、自分たちらしい学習計画の立て方、教師が教える場面と児童同士での学び合う場面との組み立て方、ふり回り活動の充実について授業実践し、検証していく。そして、このような授業改善が実現できれば、研究・研修の土台となる「国語が好き」と思える児童を育てることにつながると考える。

a) 自分たちらしい学び

単元ゴールについては、学習指導要領の指導項目からつけたい力を明確にした上で、教材の特性を活かし、発達段階に応じて教師が設定したり、児童と共に考え設定したりする。そして、単元ゴールに向けて、何をどのように学習するべきかを児童と共に考える。主体的に学ぶためには、児童が学習の中で疑問に思ったことを出発点に自分の興味関心を広げ、これからの自分の学習に活かしていきたいと考える。そのような児童の疑問を授業で取り上げたり、児童が取り組んでみたい活動を取り入れたりしながら、下記のように学習計画の立て方に段階的に取り組んでいく。



b) 子ども同士の学び

児童同士の話し合いや意見交流などの学習活動での学びを大切にしていく。友達が自分の考えに共感したり、考えが広がったりすることで発表することの喜びを感じられる。また、友達の意見から新しい発見や自分の意見との違いに気づき、話し合うことの楽しさを感じられる。児童がそのような実感ができるように、話し合いや意見交流の場を設定し、児童同士の学びの場面を多くする。教師は教材や教具を準備したり、話し合いや意見交流の仕方を工夫したりして、児童同士の学び合いが豊かとなる環境づくりを考え、検証していく。また、同時に教師の手場についても実践を通して身に付けていきたい。児童一人ひとりが、一人で学習するのではなくみんなで学ぶという意識をもち、わからないことを教え合ったり、ひとつのことについて話し合って解決したりすることで学習に対する意欲へとつなげたい。

c) ふり回り活動から生まれる学び

毎時間の学習を通して、児童自身が自分の学びの質と内容を自覚できるようにすることを大切にしていく。毎時間の学習で何を考え、どのような力をつけて、どのような疑問を持ったのかを振り返る活動を充実させ、次の学習へと活かしていく。

- ・ 毎時間の学習課題へのふり回り（めあては達成できているのか）
- ・ 単元ゴールと結びつけてのふり回り（ゴールに向けて今日の学習をどのように活かすことができるのか）
- ・ 次の学習につながるふり回り（もっと学んでみたいことや知りたいことは何か）
- ・ 学び方へのふり回り（学習の仕方は適切であったか）

(4) 基礎学力の定着

① 読書活動の充実

- ・週2回（月・水）の朝学習で読書に取り組む。
- ・読書記録カードへの記入を徹底する。
- ・図書ボランティアによる読み聞かせを計画する。
- ・先生おすすめの本を紹介する。
- ・校内読書ゆうびんを実施する。
- ・親子読書の取組を行う。
- ・教科と連携した並行読書に取り組む。
- ・図書館で本を借りる習慣づけを各学級・学年で工夫する。

② 家庭学習の取組

- ・宿題については、授業の内容に結びついた課題（主に国語・算数）と音読を各学年・学級に応じて取り組む。ただし、音読については毎日必ず行う。音読の意義を児童に明確に伝え、児童に目的意識をもたせた音読をさせる。
- ・「家庭学習の手引き」を保護者へ配付する。家庭学習の意義や家庭での取り组ませ方、時間の目安等を保護者に周知することで、学校と保護者が一体となった基礎学力の定着の取組を推進する。
- ・学年で決められた学習時間を確保する課題を与える（家庭学習の手引き参照）。
- ・3年生以上で自主学習に取り組む。学年に応じた自主学習の取り組み方について提示し、自ら課題を設定し、自主的に学習を進める力を育む。内容については「家庭学習の手引き」を活用し、めあてと約束を意識させる。
- ・学期に1回、家庭学習強化週間の実施にあわせて、落ち着いて家庭学習を行う習慣を定着させる。強化週間中は、「家庭学習の記録」を使用し、家庭学習に対する児童の意識付けを行う。

③ 朝学習の取組

- ・週3回（火・木・金）の朝学習は国語のモジュール学習（15分）を行う。基礎学力を定着させるための取組として、よむYOMUワークシートを活用する。
- ・語彙や表現の獲得の取組として、言葉の宝箱の活用や「〇〇の言葉の宝箱」や「言いかえ図鑑」の作成に取り組む。

④ がんばっ10の取組

- ・学習規律の定着を図るため、がんばっ10に取り組む。10項目ある中から重点目標を定め、定期的に取り組む。

(5) その他

全国学力学習状況調査、みえスタディ・チェックの結果を全職員で分担し、分析する。児童の強みや弱みを共通理解し、弱みの見られた単元・領域を、各学年で重点的に指導する。また、児童の実態把握のため、独自の児童アンケートを作成、実施し、研究に活用する。

IV 年間計画

一 学 期	4月 1日 (月) 研修部会 今年度の組織体制と役割分担 4月 3日 (水) 研修部会 今年度の図書館教育・家庭学習等について 4月 5日 (金) 研修部会 今年度の研究の方向性の検討 4月 17日 (水) 第1回全体研修会 今年度の研究の方向性と概要について 4月 18日 (木) 学力学習状況調査 (6年) みえスタディ・チェック (4・5年)
	5月 10日 (金) 研修部会 研修実施計画の検討 5月 15日 (水) 職員会議 今年度の研究について 研修実施計画の提案・検討 5月 29日 (水) 研修部会 ※みえスタディ・チェックの自校採点と分析 (5月 17日 (金) までに)
	6月 17日 (月) 第2回全体研修会 モデル授業提案・事前検討会 (指導教諭) 6月 24日 (月) 研修部会 6月 26日 (水) 第3回全体研修会 モデル授業提案・事後検討会 (指導教諭) ※国語科に関する児童アンケート実施
	7月 日 () 研修部会
	8月 日 () 研修部会 8月 2日 (金) 第4回全体研修会 1学期の振り返りと2学期の取組 ※全国学力学習状況調査の結果分析
二 学 期	9月 日 () 研修部会 9月 18日 (水) 第5回全体研修会 提案授業・事後検討会 9月 日 () 学年部研修会① 提案授業・事後検討会
	10月 日 () 研修部会 10月 22日 (火) 第6回全体研修会 提案授業・事後検討会 10月 日 () 学年部研修会② 提案授業・事後検討会
	11月 日 () 研修部会 11月 20日 (水) 第7回全体研修会 提案授業・事後検討会 11月 日 () 学年部研修会③ 提案授業・事後検討会
	12月 日 () 研修部会 12月 日 () 学年部研修会④ 提案授業・事後検討会
三 学 期	1月 日 () 研修部会 2学期の振り返りと3学期の取組 今年度のまとめについて 1月 22日 (水) 職員会議 今年度の研修のまとめについて提案 3学期の取組について
	2月 日 () 研修部会 2月 日 () みえスタディ・チェック (5年) 2月 19日 (水) 第8回全体研修会 年間総括・来年度に向けて ※みえスタディ・チェックの自校採点と分析 (月 日 () までに) ※国語科に関する児童アンケート実施
	3月 5日 (水) 研修部会 年間総括を受けて ※研究紀要の作成

※ミニ学習会は、定期的に企画・実施の予定

<参考文献>

- ・「新学習指導要領の展開 国語編」 水戸部修治・吉田裕編著 明治図書
- ・「これからの国語科教育はどうあるべきか」 東洋館出版社
- ・「授業の見方」 澤井陽介 東洋館出版社
- ・「12歳までに知っておきたい語彙力図鑑」 齋藤孝 日本能率協会マネジメントセンター
- ・「個別最適な学び×協働的な学び×ICT」 佐々木潤 明治図書
- ・鈴鹿市版 情報活用能力体系表～探求のプロセスベース～（令和6年4月）